

資料紹介

会津三十三所順礼記

一 会津三十三所順礼について

平安時代後期に、都の貴族や僧侶を中心に盛行した西国三十三所順礼の慣行は、次第に武士や庶民にまで広がり、全国から参詣者を集めるようになった。一方で、西国に続いて坂東や秩父をはじめとして全国各地に札所が設定され、三十三所順礼という慣行が広がっていった。

会津三十三所の起源については確実な史料がなく、室町時代に遡るといって、保科正之の時代に始まったとする説もあるが判然としない。江戸時代における順礼の様相は、たとえば貞享二年（一六八五）「中荒井与三十二箇村風俗帳」に「会津順礼と云ハ、西国順礼の如くをいずりを調、御当地三十三所之観音へ老したる男女仏詣して札を納」と説明されているように、西国への順礼の場合と同様に、笈摺を身につけた老夫婦等が、会津の三十三ヶ所の観音（堂）に参詣して札を納めるものであった。

三十三ヶ所の札所については、各所の御詠歌を版行した「会津順礼歌」が寛延三年（一七五〇）に刷物として刊行されており、この頃には、近代・現代とはほぼ同様な札所の構成であったことが確認できる。

二 「順礼記」の内容と諸本について

本稿では、このような江戸時代の会津三十三所順礼の盛行に関連する史料として、「会津順礼道記」あるいは「会津三十三所順礼記」というタイトルをもつ写本（以下「順礼記」）を紹介する。

この史料は、宝永四年（一七〇七）四月二十一日から五月一日まで、会津三十三所を順礼した一行（十二名）のようすを記したものである。一行は、若松城下の石塚観音（十九番札所）から始め、滝沢観音（十八番札所）を最後に廻って帰宅しており、順路から若松城下の住人たちと推定される。参詣した各札所の観音堂の由来や状況を書いているが、そればかりでなく、道中

*高橋 充

で立ち寄った神社・仏閣の由緒や名所・旧跡について、地元の伝承も聞きながら書き留めている。行程のうち知人を訪ねて宿泊したり、熱塩温泉では四日間滞在するなど、娯楽を兼ねた小旅行という様相も呈している。個々の札所・観音堂の沿革については、様々な書物によって紹介されているが、実際に人々が順礼した時のようすを詳細に記したものは多くはない。江戸時代の順礼の具体相を読みとることができるといえる重要な史料であるという観点から、本稿では全文を紹介する。

①二瓶文庫本

形態は横半帳一冊（縦一三・三、横一七・八cm）。表題については、表紙に「会津巡礼道記」、本文の冒頭には「会津順礼道記」と記す。成立時期は、奥書によると宝永八年（正徳元年 一七一）七月に書かれたものを、「旧重二十四歳」という人物が、享保四年（一七一九）十一月廿六日に書写したものと考えられる。喜多方市出身の郷土史家二瓶清氏の旧蔵（二瓶文庫）で、現在は喜多方市教育委員会蔵となっている。

②国分家本

形態は縦帳一冊。表題は表紙に「会津三十三所順礼記」とある。成立時期・筆者は、奥書より天明六年（一七八六）に国分丈助が書写したものとわかる。国分丈助は、大沼郡永井野組八木沢村の名主で、この写本は同家に伝来した（国分健仁家文書）。

③慶徳稲荷神社本

形態は縦帳一冊（縦二六・五、横一六・〇cm）。表紙の題箋を欠くため表題は不明だが、内容は②とほぼ同じである。成立時期は未詳で、奥書に「高橋氏義督誌」とあるので、この人物が写本の筆者であろう。表紙に「密蔵寺」という墨書があるが、この寺は、江戸時代に慶徳村にあった稲荷神社の別当寺である（「新編会津風土記」巻六十六）。また一紙目に蔵書印（方形朱

*福島県立博物館

印 印文「慶徳邨穂積氏」があり、現在まで慶徳稲荷神社（宮司は穂積氏）に伝来し、喜多方市教育委員会が保管している。

これらの諸本の異同について簡単に述べておく。まず内容面では、②③はほぼ同内容であるが、①には、その巻頭と巻末に②③にはない部分がある。後掲する全文紹介のうち「順礼の始まり」と「小池（御池）その他の御詠歌」の部分である。この部分の有無の理由はよくわからない。それ以外の部分は①②③でほぼ重なるが、詳しくみると①は、②③にはない各札所の御詠歌を収録していたり、観音堂の規模（間数）や観音像の法量を記すなど、全体に情報量が多い点特徴である。

字句や表記のしかた（漢字・仮名遣い等）の面では、②③の間にも差異があり、さらに①との間にも違いは見られる。

三 「順礼記」の流布と作者についての考察

複数の写本が別々に伝来していることからわかるように、この「順礼記」は、十八世紀以降、会津地域では一定程度流布していたことが推測できる。会津藩士の高嶺慶忠が編さんした「会津鑑」には「郷村順礼記」という書名で引用されている（「会津鑑」巻四十 松野邑の項など）。「会津鑑」では、元禄年間に成立する若松城下の三十三所（町廻三十三所）と区別して、「郷村巡礼」という名称を用いている。なお、この書で引用されている写本は、内容から享保十九年（一七三四）の写本と推定される。

十八世紀以降、順礼の慣行は次第に盛んになり、たとえば御詠歌本についても、享和二年（一八〇二）に再び刊行されたことが確認できる。この「順礼記」についても、順礼の慣行の盛行とともに、順礼のひとつのイメージとして、さらにいえば順礼のためのガイドブックのような意味合いも込めて書写されていたのではなからうか。

最後になるが、この書物の作者について検討する。「順礼記」には作者名は明記されていないが、一行の中に作者がいた可能性は高い。「順礼記」冒頭で一行十二名の中に、吉川氏、長谷川氏、遠藤氏（母）、齋藤氏（母）がいると書かれている。また「順礼記」の松野観音堂の部分には、「先つ年、今同行の長谷川氏、同門葉の星氏順礼して」と書かれている。ここに書かれている人物は、おそらく作者ではないだろう。一方で、「会津鑑」巻四十 松野邑の項には「先年今宝永四丁亥年長谷川氏・星氏・中村氏順礼」という記事がある。このうち中村氏については「順礼記」の記事には見えないの

で、この人物が作者である可能性が考えられるが、それ以上のことは今のところ不明である。「順礼記」の最後の部分で、会津や若松の繁栄を寿ぎ、このように足の弱った（老齢の）者たちが十日余りの旅を、不自由なく無事にできたのも「偏に御恵の源ふかく、流の末の我々迄も目出たし」のように書いている書きぶりからすると、藩政の支配下にあり、かつその末端に連なるような者たち、たとえば城下に暮らす富裕な町人・町役人クラスのような身分・階層が想定できるのではないだろうか。

四 「順礼記」の紹介にあたって

現在確認できた「順礼記」の三種の写本は、いずれも原本ではないが、その中で成立時期がはっきりし、かつ情報量も多いのは①であることから、本稿では①を底本として全文を紹介し、②③と大きな異同がある部分についてのみ傍線を付して注記することにした。

翻刻に当たっては、できるだけ常用漢字を使用し、頭注・脚注を付して読みやすくするように心がけた。

〈参考文献〉

- 小島一男編『会津三十三観音御詠歌』歴史春秋出版株式会社 一九七八年
藤田定興『神と仏の信仰』歴史春秋出版株式会社 二〇一一年
内山大介『特別展『みちのくの観音さま』東北の観音霊場と民俗信仰』
『福島県立博物館紀要』二九 二〇一五年
歴史春秋出版株式会社 一九七九年
庄司吉之助編『会津風土記・風俗帳 巻二 貞享風俗帳』
歴史春秋出版株式会社 一九七九年
福島県会津高田町誌編さん委員会編『福島県会津高田町近世・近代文書所在
目録(1)』会津高田町教育委員会 一九九〇年
『会津鑑』四 吉川弘文館 一九八二年

〈謝辞〉

本稿の作成に当たり、次の機関・個人の方にお世話になりました。記して謝意を表します。

会津美里町教育委員会 喜多方市教育委員会 慶徳稲荷神社 阿部綾子
国分一博 関川麻起子 会津管内の市町村での講座の参加者の皆さん

○宝永四年
四月二十一日出発

れは、纒の廻りをも厭ひ、順路の能様に任せ侍る、桧破籠やうの物奴婢に担せ、共に拾式人さなから長途の出立、菅笠の紐ゆるやかに、静に桑の木杖を携へ、宝永四年丁亥四月廿一日幸日和にて四方の山なみ青みわたり、若楓のほそやかにひろこりたるいとやさしく、老声の鶯柳を織り、八重酢醺のおくれ咲取あつめたる気色、旅立たるハ最目さむる心地して侍る、

宝永四年丁亥 二七〇七年

石塚 十九番札所

先一番に石塚に詣、仏前に念誦して、願くハ参詣の功德空しからず、滅罪生善・臨終正念・後生善所を祈り侍る、かけまくも此観世音菩薩ハ、平の義明公の七男、当国の大守佐原十郎義連公護持の本尊にして至小の尊像なりとかや、一年髻の中にいた、き、常州赤沼の大蛇退治し給事、偏に毒龍諸鬼等蛇及蝮蝎念彼観音の仏力ならずや、至小の尊軀者秘仏にて今開帳の二尊は前立也、しかしよりわきて尊崇浅からず、嫡子遠江守盛連公へ伝り、それハ七代の孫輩名若狭守直盛公、康暦元年己未此地石塚山蓮台寺を建、安置し給ふ、今年迄三百式拾九年、貴賤綿とし高袖を連、踵を継て、誠に衆生済度の御利益いとたふとし、しかわあれ共、時移り代替りて御堂破壊に及しを、先君蒲生宰相忠郷公の御母儀公、慶長拾九甲寅年御再興有けるとなむ、今の御堂是也、御前の流れ潔く、夕暮の螢者瀧沢の紅葉に対し縹素納涼の遊賞にて侍る

康暦元年己未 一三七九年

名にも似す湯川や涼し螢狩

慶長拾九甲寅年 一六一四年

石塚 御詠歌

十九番 石塚 後の世を願ふ心はかろくとも 仏のちかひおもき石塚

曝屋町を過て南の大橋ふミ轟かし行て稲荷の社有、早頃暴風頻りに吹て瑞籬の神木倒にけり、奇哉、次の夜群集の人音して、翌の日もとのことく起、今に枝葉艶にて侍る、世澆季に覃といへとも神明の不測いとも貴し、是より南青木御山村へ出、蝦夷塚の事尋けれとも知人なし、窟やに観音堂有、尊躰今ハ山寺に安地したまへハ遥拝して登らす、其渡山王権現・観音堂・八幡など拝廻り、夫ハ並松之中幾年月をか経ぬらん、もとハ相生のやうに梢ハ雲を凌て吹風涼敷、坂を踰躑て山寺へ着、

御山村・会津若松市

御山 二十番札所

一称徳天皇第四十八代天平神護元年^乙神護山照谷教寺観音薩陞開基より宝永四年迄九百四拾年、緑樹四隣を囲、一色一香の春の花は東山の中道に開き、一実円頓の秋の月ハ西畔の大河に浮ひ、南は峨々として山高く、北ハ寂寞として人の声なく、礪水松風同一法性にして二も又三もなし、誠に人輪の穢なく粧いさき能く覚へければ

山寺は浮世のちりをいとふかや くもる心の月も澄てふ

一堰六地藏

住持もしれる人に侍る俣、破箆やうのもの排き、暫休み諏方の原へ出、野寺の薬師仏を拝し、堤沢の堰六地藏へ参りて拝ぬ、伝にいわく往昔より六地藏を安置し、其例巨宏にして御堂の莊嚴もいみしく、貴賤袖をつらね群集し拜れさせ給ひけるとなん、そのころおひわたり菽生茂 朝の露に参詣の裔を湿す、其時より言伝へたるにや、今も世俗菽の原といふ、然るに寛永二十年癸未の春回祿の災に罹り仏像経巻古歴の伝記焦土となり、僧俗も退散し跡方もなくなり行けるとなむ、惜哉、洛陽の六波羅を学ひたると、唯里俗の聞伝へたる計にて、いつの代いつれの人の開基と言事定かならず、其頃一堰村に山田近右衛門と言者有、奇瑞を蒙り常に貴見詣けるに、是を深く嘆き草堂を営、自ラ六地藏を造て立、昔の名のみ残し侍る、爰に浄侶の僧向菅西入さきつとせ是を見、心を傷しめ、絶たるを継、廢れるを興すとかや、止事なく大願を發シ、十方檀那の助力を憑み、御長ケ五尺三寸に造立し侍る、今の六地藏是也、斯て六間四面の御堂を建、安置し奉り、再回むかしの春に帰り、永く繁栄の靈地と成らん事を願ふと、長物語に日も闌ければ留守居の坊へ暇乞し、例の桑木杖を携へ大河を渡り大石村に上り、夫々大門村、是ハ左下りの門前なれば此名有にや、覚束なし

御山 御詠歌

左下り 二十一番札所

一左下り無頭観音、天長七^庚年四月十四日弘法大師の造立、御堂五間四面三重也、宝永四年迄八百七

十八年、其後百五年を経て、延長二年^甲三月十三日越後州にて罪を懐く者走て、此龕内に隠れける

二十番 御山 はるくと登りて拝む岩やさん いつもたへせぬ松風の音

天長七^庚年…八三〇年

延長二年^甲…九二四年

天平神護元年^乙…七六五年
②③本…九百四拾三年

寛永二十年^{癸未}…一六四三年

左下り 御詠歌

に、追来て是を切、首を携て越に帰り見るに観音の御くしなり、崇て彼地に安置し有頭の観音と言、郡を頸城と言、夫々左下りを無頭の観音と言称し奉るかや、延文三八月富田祐義麓観音禪寺を建立、夫々實相寺に属ス、委は伝記に見へたり、并銅版にほり付今猶存す、御堂の下より嶮岨を伝ひて草の根をとり漸平地に出、堤の水際を過て相川村に着

延文三…一三五八年
実相寺…会津若松市
相川村…会津美里町

二十一番 左下 左下りハ岩にそひへて掛ケ作り いつもたへせぬ嶺の松風

相川 二十二番札所

一相川十一面観音菩薩いつの世いつれの人の開基といふ事定かならず、御堂三間四面南向、山の際に立、惜哉、唯相川の観音と名に流れたる計也、里俗をして開帳せしに、最殊勝に権化の妙彫にいまそからん、やんことなく拝れ給ふ、幾星霜をか経給けん、仏鉢御長ケ四尺余の立像、殊外に損しさせ給ふ、あわれ心有人再興もやとつぶやき坂を下りけるに、御手洗にしらぬ翁の形見へ侍る、高歌に明鏡を掩ひ、昨日ハ少年、今ハ白頭と許渾か言し、いとむへなり

汲影に近付返す清水哉

相川 御詠歌

二十二番 相川 朝日さす夕日か、やく相川の 月もろ共に出る御手洗

高倉 二十三番札所

一大八郷村高倉観音堂、伝に言、天長年中弘法大師草創の地と言ひ、山は四面円成にして如意宝珠の願

大八郷村…会津美里町

相也、世俗円山といひし、また稻葺山と言、昔ハ山の頂に立せ給ひ、麓の仁王門に並て寺有、高倉寺と言、中頃千代和泉と言者再興し、後代修復の料を計て砂金朱漆を埋之置けると也、隠けん時あらん御堂幾度か替り其跡今に有けるとなり、院宇いつれの時に破壊し、御堂も又六拾余年前に今の地へ移しけんとなん、尊躰ハ聖観自在菩薩いのりて達せずと言事なく、如意円満の靈仏にてましますとかや、日も高ふ侍れとも知人して大八郷に泊る、明れは廿二日旅店を立て福永村藤卷大明神へ詣侍る、四十年前迄ハ宝塔の余波のみ有しに、今ハ其形もなし、此村昔ハ火玉と言、前の大守加藤義明公文字を忌給ひて、寛永年中福永となん改給ふ、関山・八重松・嬴岡もとは火玉に属しけると也

大八郷村泊
○四月二十二日

高倉 御詠歌

二十三番 高倉 むかしより宝をつみし山なれハ 人の願ひをみつる高倉

関山 二十四番札所

一関山秘仏の観音開闢の伝記不詳、寺号さへ知人なし、御堂三間東向也、別当屋敷の跡に存ス、もと来

関山…会津美里町

鳳来寺

し道へ帰り、杉の一ト木の元より山際をまわり醫王山鳳来寺へ詣ぬ、本尊薬師如来ハ弘法大師の妙力、会津五仏の随一火玉当寺是也、むかしハ山の上に堂有、其跡今に残りて有けるとなん、慶長十六^辛亥八月廿一日の大地震に御堂倒れけるを、今の地へ移し奉ると也、此時柳津・新宮も崩、山崎も湖水となりけるとなり

慶長十六^辛亥…二六二一年

関山 御詠歌

二十四番 関山 散花をとむる火玉の関の山 雲おり登る道ハひと筋

領家 二十五番札所

一領家村観音堂、寺を常楽寺と言、建長元^己酉釋の常近開基、御堂五間四面、宝永四年迄四百五拾九年、延ハ濃州の産也と言、鰐口有、銘に大永三年^癸未二月十五日と侍る、其外弥陀・十王等の古仏有、永祿の頃迄者三拾貫の税を納しとかや、何れの時か没収せられ、楽つきて悲み来る世の習ひと佐し

領家村…会津美里町
建長元^己酉…一二四九年
大永三年^癸未…二五二三年

領家 御詠歌

二十五番 領家 朝日さす夕日か、やく領家寺 大悲の光り有明の月

②③本…いと

富岡 二十六番札所

一富岡邑日耀山福生寺十一面観音座像の大仏、御長七尺三寸無比の権作也、御堂五間四面、頂上^{テウ}仏者美濃の谷汲より来顕し給ふとなり、かゝる御仏に値遇^{チケ}の縁を結びまいらす事も思へは、いと有難き事になん侍る、しかし均^{ヒトシ}しからぬ人心にしあれハ、目札^{モク}計して過ぬるも侍るなん、はかく敷住僧もな、少も増れる寺あれハ春秋に移替、古歴の縁記宝庫の什物もうせはんへるとなん、いたましき事なりと度々うちうなつき里々を過行程に、高橋を渡りて向ふに舟岡となん申を聞て

富岡邑…会津美里町

余花白し舟岡山の八合帆^{カウホ}

仁王寺
此所尾岐一郷の鎮守稻荷明神の社地にて侍る、されハ使令の白狐尾の二岐に侍れハ所の名にせるとなり、並て牛伏山仁王教寺に謂ぬ、大同年中徳一大師の草創、自瑠璃光如来・十二神将を彫刻して安置し給ふ、無二の霊場なり、寺の前を牛か原と言、いわれ有り石有り、是より名におふ大岩か嶽、杖に

把りて同行の手を取、腰を押へ互に扶助られて一ト歩に息ひ憩ひてハ行、漸坂の半に至りぬ、され

は近き比及も四十余りの我友おもわすも死出の枝折に分ケ入られしそかし、財宝もよしなしと妻子とも随わす、黄泉中有の旅の空、唯独り越らんと思へは哀さいわん方なし、皆我々ハ六十に余り古稀の齡ありて、しかも偕老夫婦伴ひ、今此坂を越侍る事の幸哉、只哀なりけりと今日の無事を喜ひ居させ給へ、登れや登れと御手洗の元に着ぬ

富岡 御詠歌

二十六番 留岡 朝ほらけにきほふりに立けふり 誠の人をとむるとみおか

大岩 二十七番札所

一大岩秘仏の観音錫杖山法林寺と言、御堂三間四面南向、往昔より仏体を秘して別堂に住する僧たにも拝する事なしと言へり、今ハ住持の院宇さへ絶て只御堂のみなり、帰るさは膝頭かくつき、漸七坂を下り小山に休ひ仁王村に宿る、明れハ廿三日旅鷹を立、樋の口合松ノ岸村へ懸り手児明神社参し奉る、抑此御神ハ明神ヶ嶽に鎮座御座候を此地へくわんちやうし奉ると也、欽明の朝に伊佐須美の神ハ伊弉冉にてましく、手児者素戔嗚尊にて見まそかるよし記録に侍る、是合永井野村

大岩…会津美里町

仁王村泊
○四月二十三日
手児明神社

大岩 御詠歌

二十七番 大岩 ちかく見て遥るく登る大岩山 池に影さすくらかけの松

高田 二十八番札所

一高田天王教寺観音薩埵ハ御堂三間四面南向、前に丸清水有、三拾三年に一度開帳して諸人に拝れ給

高田…会津美里町

伊佐須美神社

ふ、依て仏龕の秘封を輒解事なし、名におふ奥の細道轟の橋打渡り、伊佐須美の神社に参りて拝みぬ、されは此御神ハ延喜式に載所奥州二之宮となん申侍る、欽明天皇 申年高田村の坤隅明神か嶽より勧請下し奉るとなり、神主三拾六人、三百貫の社領高田・長尾の両村合是を納しとかや、村の法憧

寺の住智鏡上人上落して旧例を達し天聴、天文二十年十二月十四日再正一位伊佐須美大明神の勧額を

天文二十年…一五五一年

賜、筆者中山大納言いとやんことなき神社にいまそかりける、並て文殊堂有り、華鯨の銘に伊佐須

美大明神御本地文殊堂の鐘大檀那平盛高本願別堂円須法印同智鏡上人檀越洪河源左衛門永正十四丁

永正十四丁…一五一七年

四月十九日侍る略、宝永四迄二百七年也、仁王門の前に智鏡の霊塔有、三拾年計近曾宝塔の四柱残

りて有しか、惜哉、跡形たになし、是より雀林へ順路なり

雀林…会津美里町

高田 御詠歌

二十八番 高田 昔より立とも知らぬ天王寺 奥の細道と、ろきの橋

雀林 二十九番札所

一雷電山法用教寺御堂五間四面、十一面観音菩薩者御長ケ三尺有、人皇四十五伐聖武皇帝養老四年庚申

養老四年庚申…七二〇年

徳道上人草創、論言依て稽文会ケイブンエ・稽首勲尊像を彫刻す、供養之導師菩提僧正、開眼之導師行基菩薩

也、大同年中徳溢是を再興、本堂に御影有、三拾三身の像、是ハ運慶か作所也、開基ハ宝永四迄九百

八拾八年縁記一軸に詳也、御堂の前に桜有り、縁影茂りて幾年月をか経ぬらん、老木の春毎に折ヲ忘

れす、咲花の色香も美なり、昔いか成人の虎の尾と名付たるは、名におふ一木の誉ホマレならずすや、時な

らねとも

虎の尾の影に足引桜哉

林の中ハ北へ出て山際を通、堤を左にして中田村に着

中田村…会津美里町

雀林 御詠歌

二十九番 法用寺 参り来て西をはるかに詠れハ 雨露しけき古かたの沼

中田 三十番札所

一根岸中田金銅の観音菩薩御長ケ六尺式分、同不動・地藏の両尊、御堂五間四面東向也、文永十一甲戌

文永十一甲戌年…一二七四年

年八月八日開帳、宝永四迄四百三拾三年、昔佐布川村の長者常後と言者、寵愛チウアイの一女に別れ追福のた

②③本…開眼

め造営せしと也、御堂の莊嚴シヤウゴンもいみしく七堂に及と言り、末代再興の領にあて井田百□畝并山林を寄

せしとなり、常後ツネノ一子を失ひ此事発記し侍るに、思へハ悪と言も善なり、逆縁も菩提の善縁ならずや、

開基より五年後、弘安二年己卯 卯寺を建て普門山弘安寺と名付けるとなん、寺の縁記に詳也、近年御堂

弘安二年己卯…一二七九年

破壊ハエに及しを現住再興、境内の寄麗キレイ一点テンの塵チリなく目を拭兼たり、花実かね備へていと頼リヨしき住侶リヨにて

侍る、是より田沢越に柳津へ参りて塔寺へ出侍らんと謂けれとも皆草臥足なれハ、又こそ参らめとて

下荒井村泊

村へ出れハ、日も斜にて西の山端より腰もとへさし入れハ、頼む誓の阿弥陀笠を被カフり、漸下荒井に

下荒井…会津若松市

行泊りぬ

中田 御詠歌

三十番 中田 廻り来て四方の千里を詠れハ 是そ会津の中田なるらん

下荒井 十四番札所

一 下荒井蓮華寺観音御堂東向、脇立千体仏御立、昔者別閣に立せ給ふを、何れの時今の院移し奉るに

や、御堂の遺趾今猶存す、北に三鈷の松有、カクレキ 康暦元年己未 密宗仁範、ハシ 葦名若狭守直盛公に随ひ鎌倉雪

○四月二十四日

の下廿九年、飯豊山仙達の事天文八己亥 八月先例に依て大守盛舜公より賜と伝記に見へたり、明れ

は廿四日

②③本…下谷来り此寺草創、
宝永四迄三百一拾九年
天文八己亥…一五三九年

下荒井 御詠歌

十四番 下荒井 高野山よそに嵐の下荒井 三鈷の松に法の朝風

館 十三番札所

一 館邑観音堂古館院福聚山観音密寺真言宗、天正三乙亥 圓智再興、御長卷尺余座像也、三拾三所の其一

館邑…会津若松市
天正三乙亥…一五七五年

なりと記録出たり、此村古館の跡なり、昔いか成る人の住侍るやらん、里俗も名さへ不知、誠に生住
異滅の移り行消息いと詫しけり

館 御詠歌

十三番 館邑 はるくと参りて拝むよしみ寺 仏のちかひあらた成らん

田村山 十二番札所

一 田村山観音堂三間四面、別当法田寺院を養泉と言、誰か謂し春法の種を植すして秋の果を得る事なし

田村山…会津若松市

といへる、思ひ出て

蒔種や御法て積る田村山

行て北に一村の森に八幡の宮有、社地広々として木立物ふりたり、昔葦名氏の倍臣平田式部塚原を領

せし時、此御神を崇アカメけるなん、今も村の満蔵寺の社僧にて所の鎮守にてましますとかや、式部か館跡

今猶存す

田村山 御詠歌

十二番 田村山 千早振神や誠に住吉の かさねくの森のしめ縄

塚原 十一番札所

一 塚原邑馬頭観音御長ケ卷尺八寸、行基菩薩の妙力なりといへり、日光山末寺也、瀧古山満蔵寺相応比

塚原邑…会津坂下町

塔寺泊

丘の開基、古の霊場也と言、是谷細工名村へ掛り大道へ出、坂下村に知る人有て暫つかれを休めて塔

塔寺…会津坂下町

寺に宿る

塚原 御詠歌

十一番 塚原 昔よりたか立そめし古しきの 久しかるへき塚のはらかな

塔寺 三十一番札所

一塔寺千手千眼御長ケ式丈八尺、二十八部衆各六尺七寸、金塔山惠隆寺ト称す、大同年中弘法大師彫刻し給ふ、御堂五間四面、執金剛神ハ仏工運慶カ造所ナリ、同作の金剛力士当国に三所有、所謂第一野

沢如法寺、第二塔寺、第三高田文殊の仁王是なり、伝聞、和州初瀬の観音者式丈六尺ましますとか

や、今此尊像者式尺高し、凡扶桑第一たるへし、委ハ縁記に見へたり、誠に大念見大仏と同蔵とやら

んに説せ給ふとかや、明れは廿五日八幡の宮へ社参し奉る、抑此御社者 後冷泉院の御宇天喜三年

○四月二十五日
八幡神社

天喜三年乙未…一〇五五年

乙未 伊予守頼義公靈夢に依て勸請、同五年丁酉六月三日同義家公修造と言ひ、安倍氏退治の時なり、

同五年丁酉…一〇五七年

源君の兜の鍛遺記の一軸今猶在、天喜三より宝永四迄六百五拾弍年、委ハ伝記に見へたり

塔寺 御詠歌

三十一番 塔寺 はるくと参て拝むゑいりう寺 いつもたゑせぬまつ風の音

御池 三十三番札所

一御池村観音奇瑞有て池中より出現し給ふとなり、村の白雲山清寧寺移し奉り、其後御堂を建、安置

御池村…会津坂下町

せり、今者羽黒山西光禪寺と改、縁記一卷に委有、正観音御長五寸程有

濁りにもしまぬ御池の蓮かな

西に出れハ谷地村也、森の中に四拾八ヶ所権現の社有、元暦元甲辰正月佐々木四郎高綱宇治川を渡し

元暦元甲辰…一一八四年

ける駿馬生月、此所より生レ出けるとなり、釜か測・親沼今猶有、くわしくハ記録に出たり

御池 御詠歌

三十三番 御池 廻り来てめくみも深き御池寺 池の蓮も我をまつらん

青木 三十二番札所

一青木村示現山聖徳寺観音御長式尺余有、御堂三間四面南向、慶長十六辛亥八月廿一日の大地震に御堂

青木村…会津坂下町
慶長十六辛亥…一六一一年

崩れ、仮に尊像を青津村の亀甲館へ移し奉るに、いつとなく今は青津の観音と成給ふ、元寺者あらた

②③本…聖徳寺に

に観音を安置し、毎年三月十七日旧例の会式九百余年に及ふと言ひ、緑樹陰深ふして夏なから名禽梢

に嘯り、いと心の涼しければ

花も見す今は青木の下涼み

峯州和尚

当寺中興峯州和尚の事現住へ尋侍りしに、州者当所の産にして生江山城か氏族也、前の住峯円に従て
薙髮し中比新善光寺に暫住す、和漢の才に達し碩学の誉有て、人皇百七代王親町の朝洛陽百万遍知恩
寺に住し給ふ時、州を禁闕に召れ説法をせさしめ給ふ時、勅問に依て葦名氏の族なるよし奏せらる、
其恩をほふせんとして永祿元^戊午年当国に下り、大守盛氏公へ叙爵の綸旨を携へ来れり、其比都鄙阻

永祿元^戊午年…一五五八年

隔にして芦名氏無位也、大守甚喜悦し給ひ州をして崇敬してことなり、角て当山を中興し、唐の因陀
羅の筆十六善神罷綱彩色の絵、獲の香炉当寺に寄附せらる、是者禁裏法談の時玉座より賜ふと也、い
とやんことなき重宝にて侍る、其外什物亡拳にいとまあらず、且又州盛氏公へ告て神刺村来迎院法然
の雕像并戸張二卷高岩寺へ伝移し今猶有、昔藤原秀衡法然上人に深く帰依し、夷洛の隔たる事を患て
肖像を刻ましめ、荷負して当国に下り、神刺村に至て甚重運転人力に難叶、奇瑞を感じて一字を伝
し御影を安置し、戸張をかけ来迎院と号し、今も其渡り応湖川の辺法然原と言、州洛に帰りて後六十
六歳にて入寂、角長物語に日も闕いさ、せ給へと玉銚をたとりぬ、何々善ハ積にいとわずとかや、青
津の観音へも程近し拝みてんとて詣ぬ、是則青津村の観音にてまします、是又青木渡に棹さし漕出
るに山崎も程近シ、誠や去ル十月十三の日山崩れて大川を埋み下流一滴もなく、涸魚は陸に浮水をく
ひ、河伯ハ山に求食とか言しか、何れの程そと尋侍りしに、山の峽のみ多くして、こなたよりは見へ
すなりと船頭うめくうち岸の額に着ぬ、根をはなれぬ草をとりくにあかりて大沢村を過、是そ巡
拝の第一大木に着

高橋 充

青津観音

青津…会津坂下町

青木 御詠歌

三十二番 青木 春は花夏ハ青木にしけりつ、 秋ハ紅葉にそむる露霜

大木…喜多方市

大木 一番札所

一大木村観音菩薩聖観音也、御長老尺式寸徳一大師御作座像、紅梅山常安教寺安置し給ふ、伝ニ曰徳一
大師開基の地なりと言、真言宗にて弥勒寺の末寺、御堂の粧嚴もいみしく別閣にして拝れさせ給ふと
也、天正年中伊達氏当国を乱せし時、兵火に罹り什宝伝記焼失せけるとなん、御堂の跡今猶存、当塚

弥勒寺…会津若松市

新宮三社

と言、又鶴塚と言有、いか成故有りてか、当国巡拝の第一に拝れ給ふ物を、委く其始をしらすかし
日を重ね廻り大木の里に来て むかしを問へは松風そふく

濁川の浅きに便りを得て新宮へ社参し侍る、此三社の御事ハ言語に絶し筆舌に覃難し、今流布の縁
記にも書洩したる事多しとさる人の申き、住持者釈有りて知る人にしあれハ酒茶の饗応深く切にし

②③本…訳

て、今宵者こなたに明し、旅の疲をなをしてはなせとひらにととめられけれども、一連の中に道の程
いそかしけなる人有て、蓑笠をよほる擔わせ、あわた、しけれハ、又こそ参らめと立別れ侍る、住持
も酔のまきれ文殊堂の御前迄見送り、下官も梢の隠る、迄ハ顧見かちに、夫ハ松野へ趣き、行々て

慶徳稲荷社

左の山際に並木の奥物深く慶徳の鎮守にて稲荷の社有、是者源翁和尚慶徳寺に住し給ふ時、応永三

応永三丙子年…一三九六年

丙子年の春夜三更に至るの此及一女面前現す、是何人そと問ひ給しに那須野に濟度を受し者にて侍る、
恩を謝せんかため爰に來りぬ、今より擁護の神とならんと、頓に白狐となりて尾を卷蹲踞シ、暫時有
て当山に走れり、故に卷尾山稲荷寺と当峯の名とすと記録に出たり

大木 御詠歌

一番 大木村 万代の願ひ大木の観世音 あの世と共にたすけ給へや

松野 二番札所

一松野千手観音御長壹尺七八寸程、東向堂、天平元年^己行基菩薩此所に至り一夏の間弥陀・観音・地

松野…喜多方市
天平元年^己…七二九年

蔵の三像を彫刻し、一字を営み慈福山千光寺と号す、北の三森山に西蓮寺といへる一院を立、奥の院
とし僧房三百六拾宇魏々として毎年四月十七日大会の式を定、十二の児の舞有りしとかや、今児塚と

言有、天平元年より宝永四迄九百七拾九年星霜打積りて、微妙の粧嚴もいつとなく朽果、堂舎僧房一

宇もなく纔に観音の金殿にのこりけるに、十とせ計さひつころ回祿の災に罹り仏像経くわん遺記の什

物焦となり侍る、先つ年今同行の長谷川氏、同門葉の星氏巡礼して此所に至り、かれを見是を聞、心

を痛ましめ新たに千手大士の立像を莊嚴し草堂を営み安置せり、寔や靈山会場も今者鹿の臥所とかや

松野泊

聞伝はりしか、盛者必衰の分野をしらしめんとかや、勢可有人ハ心有へき事也と打語りて松野に伯

三森山掘出物

りぬ、旅店の主成者、年の比六十余少し心有きはに見へ侍りしか、出て語りけるは、寛文十年^{庚戌}正月廿七日里人三森山を掘出たる石函・磬・特枯・銅筒・瓶七箇・刀大五箇・小廿二、大治五年^{庚戌}四月二日大檀那平孝家散位源朝臣俊邦と二行に書ケリ略、村の長官府へ訴出しを向井氏と計半取て旧事雑考とかやに載られしと聞伝へ侍るよし言、同行の長谷川氏被申しは如此の物土中に埋たるはいか成故にしやと言ひ、吉川氏答て、しらすかし、想到当寺繁榮の時寄附の物成へし、石函に入たるは火矢を厭ひての事なるへきか、然に世乱れ僧俗居を安せず、賊兵の難を恐れて埋み侍りしにや、其後猶干戈打続き僧侶も散々に成行、仏閣も退転しけるにて知る人なく埋みし俣にて星霜を經し成へし、隠顕誠に時有哉、大治五年の寛文十年迄五百四拾一年を経て、支干同じきに掘出したるもいとふしき成と談して木枕に夢を結ふ、明れば廿六日旅宿を立て綾金村

寛文十年^{庚戌} 二一六七〇年
大治五年^{庚戌} 二一三〇年

旧事雑考…向井吉重著「会津旧事雑考」

○四月二十六日

松野 御詠歌

二番 松野 朝日さす夕日か、やく大山寺 松の、里にはる、うす雲

綾金村…喜多方市

綾金 三番札所

一綾金長流山金泉禪寺觀音堂三間四面東向、元弘元年^{辛未} 葦名遠江守盛宗公開基、僧房二十四宇有しと

元弘元年^{辛未} 二一三三一年
②③本…草創

なん伝記に見へたり、創る宝永四迄三百七拾七年なり

綾金 御詠歌

三番 綾金村 露の身の夢まほろしの世の中に 身をあやかねと出いのるらん

高吉 四番札所

一高吉村千手觀音御長式尺程有、吉例山徳性寺則寺に御建候、伝に慈覚大師の草建の院也と言ひ、後柏

高吉村…喜多方市

原の文亀元^{辛酉} 年真言の徒盛尊中興すと記録に出たり、宝永四迄二百七年、いつの頃にや当宇焼失し

文亀元^{辛酉} 二一五〇一年

けるに、奇哉、仏像のみ残らせ給ふ、今の住上落して再興してけるとなり、折節時鳥のおとつれければ

よしやよし音も高吉の郭公 爰をせにせよ杉のひと村

願成寺

是の東の大道江出、小荒井を過、村松の上三の宮叶山願成寺は後堀川の院第八十五代嘉禄三^{丁亥} 年隆

②本…松村 ③本…松野村

寛律師の開基多念義一派の正流今四百八十一年に及、円光大師入寂十五年後也、洛陽東山長樂寺ハ

嘉禄三^{丁亥} 年 二一三七年

律師^{グクキヨ}寓居の院なりと云り、中興木食行誓、寛文中北の山際より寺を此地に移し、仏像伽藍を建立シ
結衆して不断念仏修し、自松杉を実植し今幾千株^{チウ}と言数をしらす、大守 正之公御聴に達し白銀を賜
ひ、後に新に若干石^{ソク}を寄附し給ふ、鐘の銘に委し、先ツ年建福寺の住侶黙水和尚三の宮にて

蓮社結ヒ来テ経タリ幾歳ヲカ 廬山恵遠去テ還タ生

吟身倚杖ニ閑ニ^{ソハタツレハミミヲ}敬耳 澗ン水松風念仏ノ声

瑞雲山興徳寺四十一世葉伝和尚和

開基道者称ス行誓ト 木食草衣宗トス往生ヲ

更ニ得テ^イ偉人詩筆ノ^{タケクシヲ}巧 山門ノ^{ヅバ}瓦礫ク悉金声

三十三室観音

是より赤坂林の道芝^{イサキヨ}潔くふりたる二葉の松風ハ岸打波の音かと疑れ、気色いとおかしかり、又三十

三の室の観音有り、里人行連尋ければ、昔此あたり何の長者とか言てとめる人有けるに、年老たる

二親もてり、西国の巡礼を願けれども、あまさかる鄙のこなたより遠き雲井のあなたまてはなちやり

まいらせんも心うく、又願ひを満せぬも本意なく、此観音を^{イトナ}當み参らしめ、老の願ひを果しけるとな

ん、代々を経て久敷事にや、姓名は伝へ侍らすと申、誠に孝心と言、功德と言いわん形なく侍る、同

行も一室ことの恭敬をなし松原を過て熱塩村ニ着

高吉 御詠歌

四番 高^ヒ声 かきわけて参りて拜む高芦の 仏の光り道そか、やく

熱塩 五番札所

一熱塩千手観音菩薩御長ケ壱尺七寸程、堂南向、御影堂の北に有、此寺往昔は五峯山慈眼寺と言密寺也

けるとなん、源翁和尚住し給ひて分山を護法と言、寺を示現と改給ふと言ひ、委ハ塔の銘に侍る、応

永七年^{庚辰} 正月七日和尚入寂し給ふ、今年迄星霜三百八年御影堂を大寂院と号、俗曰此所にて殺生を

を^マ謡侍れは魍魅^{チミ}必妖をなすと語り、諷所の垂示^{ツツケン}の話なればにやと言、爰に温泉有、源翁和尚沐浴^{モクヨク}の

料に山神^シの出す所也と言ひ、此湯に逗留四日長途の勞れをはらし、明れは廿九日粟生沢・宇津野山路

○四月二十九日 熱塩温泉泊 四日間滞在

②③本…赤崎林

熱塩村…喜多方市

応永七年^{庚辰}…二四〇〇年

龍泉寺

過、入田付村より中田付村へ出、龍泉寺へ立寄、現住も知れる人にしあれば暫く休みて爰かしこ見侍るに、住侶へ尋けれハ、是者天正拾三年^乙五月十日葦名の倍臣松本備中内意に依て伊達の部将原田

②③本…見侍るに、後の林に古墳多く見え侍る
天正拾三年^乙西…一五八五年

左馬・新田常陸三千余騎を卒し入田付越より襲来^テテ五十余村を放火し、同五月十二日の早晨に龍泉寺の北二間在家惣社の原に陣をとる、新田ハ先登して稲田村白山の社の前に扣たり、黒川の諸将三軍に分て、一軍ハ中目式部、一軍ハ慶徳善五郎、一軍ハ佐瀬源兵衛等塩川小荒井を歴^テテ寺窪に陣をとる、源兵衛者衆を卒し勝を経て稲田に向、一軍ハ熊倉を経三方ヶ旗をす、め大に責戦けるに、左馬・常陸か勢若干討れ引退く後に其首骸骨を埋ける墳墓^{ツツホ}今壘々として十六、龍泉寺の林の中ニ有、同五月十二日伊達政宗者衆を卒し松原口の館にさ、へられけるか、昨日中田付の敗軍^{ハク}ヲ聞、術^テを失ひ徒^{イタツラ}に日数を経て後、五嶋孫兵衛^後ヲ是を守らせ、衆を師て長井に還^{カヘ}り給ふ、古館今猶存す、宝永四迄百式拾三年摺上一戦より三年前なりと、長物語に日も闌、勝村へ急く

高橋 充
熱塩 御詠歌

五番 示現寺 後の世をたすけ給へや観世音 慈悲あつ塩へ参る身なれば

②③本…住持の長物語に勝村…喜多方市

勝 六番札所

一上勝邑観音菩薩立像四尺余、御堂六間四面二重のたるき・丸柱・組物等古代の造作にして珠勝也、永禄^戊午年大守盛興^{モリヲキ}公再建し給ふと也、南門に並木有り、山門の仁王ハ朽果給ひて其形^{カタチ}とも見へす、御

永禄^戊午年…永禄元・一五五八年

勝御前の伝承

堂の後に鐘有り、永禄七年^甲子季夏日大檀那平盛興并隠居盛氏と記せり^略、寺を松嶋山勝福寺と言、二年先に焼失して仮屋也、伝曰、昔勝の前と言へる宮女松嶋や雄嶋の眺望をしたひ、はるく此地に來りて重き病に臥身^{フシ}まかりなんとしけるに、我願ひのみたらぬ事を嘆^{ナガ}きぬ、里俗も岩木ならねハいたわり憐^レて松嶋の致景を模^モし眺望^{チヤウボウ}に備へぬ勝れ歎^スひにたへす日を給て身まかりぬ、其後中将の何某とかや言人尋下り悲渙の余一字を建、此観音を造立し婦人護持の本尊を心内に納め紺殿を立安置し給ふ、今の御堂是也、永く幽魂の追福に修せられしと也、其わたり爰かしこ見廻り侍りしに、是や松嶋を嶋の景色ならんと押計、古歌に、漕^コくる、八重の塩路をゆく舟の名残おしまの月のいりうみ、と詠しけ

永禄七年^甲子…一五六四年

ん、昔を今に眺待るに御堂の西に勝の前の古墳有り、印に一木の杉を植たり、青苔露深ふして裔をそほつ物哀也、千歳ふる松も薪に摧かれ、塚は縛れて田となるとかや言しか、前後より耕し狭めければ頓而跡形もなく成行なんといと悲敷寛待る、折から杜鵑のおとつれければ、御堂の柱に矢立の切れ筆にて

時鳥声もすくれの里に来て あわれ昔の音をのみそ鳴

勝 御詠歌

六番 勝村 日わてると山の氷ハよもとけし 里にしくれのあらんかきりハ

熊倉 七番札所

一熊倉村紫雲山光明寺観音堂、昔ハ別閣にして拝れ給ふとなり、天正年中に兵火に焼失、当寺に移し奉

熊倉村…喜多方市

るとなん、知る人有りて暫休み、高柳・小沼と言在所を過て、東に名におふ辻の地藏堂へ参りて拝

みぬ、是ハ常世村、此所に諏訪上下を勧請し奉る、村の鎮守にてまします、此宮居 後冷泉院の御宇

天喜三年の草創にして祭礼九月十三日也と言ひ、同行も氏神にていまそかれは、ぬかつき参らせ竹屋

竹屋村…喜多方市

村着

熊倉 御詠歌

七番 熊倉 故郷をはるく出て熊くらの 仏へ参る身こそ安けれ

竹屋 八番札所

一竹屋邑如意輪観音御長三尺運慶の造所也、御堂南向三間四面、今年迄五百式拾八年に成ると言、天正

天正元 癸酉年…一五七三年

塩川泊

元 癸酉年曹洞の快元大雲山観音寺を草創と言ひ、行々て塩川と申、日もいまたたかふ侍れとも知る人

塩川…喜多方市

○五月一日

有て泊りぬ、明れハ五月朔日旅廓を立、琵琶沼の辺りを過て

竹屋 御詠歌

八番 竹屋 今朝の日ははるか竹屋の観世音 急き参りて拝む旅人

遠田 九番札所

一遠田村福聚山大光禅寺千手観音座像三尺七寸仏工運慶か作所也、近き比現住再興、左右ハ毘沙門・

下遠田村…喜多方市

不動の両尊也、住侶ハ極老にし侍る、誠に碩き学くの誉れ有しを、惜哉、余算なき事よと打つふやき

寺の下道へ下りて渡舟に棹さす、折柄早苗とる半なれば

行舟や声も遠田の田植哥

古めかしけれともうち思ひたるまゝなり、沼の上より大道へ出、粟の宮に知人有て暫休み、それより
勝常村

勝常村…湯川村

遠田 御詠歌

九番 遠田 後の世を願ふ心を照らすらん 遠田の仲（中）に出る月かけ

勝常 十番札所

一勝常邑観音正観音菩薩なり、御長七尺立像、弘法大師草創、昔七堂の時ハ其一字にして拝れ給ふとか

大同元西年…丙戌・八〇六年

や、いつの時か廢し本堂に安置し奉る、抑瑠璃光山勝常密寺者、往昔磐梯を病悩山と謂し比おひ、大

同元西年戊猪苗湖イナコク湛へ月の輪・更級サラシナの二庄其外民村水底となりけるとなん会津山水記に見へたり、

翌年丁亥…大同二・八〇七年

其頃悪風吹、五穀熟さず、妖怪ヨウクハイ多く人民安からざる事達 天聰、翌年丁亥空海平城天皇の詔ミコトトリを受、

当国に下り加持し給ひ、山磐梯と改、頂上神祠をたて磐梯明神と号し給ふ、川沼郡八田野村稻荷の社

②③本…東は恵日寺、西は日光寺、北は大正寺、南は堂寺

者其座也、所謂五仏の薬師を彫刻し五所に安し給ふ、東ハ恵日寺、中央勝常寺是なり、いとやんこと

なき梵跡にて侍る、しかわあれと代換カハリ星移て堂塔も破壊ハエし、鐘楼も破れて花鯨者壤に埋れ、諸行無常の声もいつの時にてか有なんや、性情にまかせ時ならねとも

花の時鐘の苔（苔）はなし勝常寺

勝常 御詠歌

十番 勝常寺 幾度もあゆみをはこへ勝常寺 生れ会津の中の御仏

高瀬 十五番札所

一高瀬村十一面観音菩薩御長ケ三尺四寸運慶か作也、高吉山福昌寺と言、天正七年己卯曹洞の道谷コクいゑる僧中興すと語り、当初承安元ノの頃奥州に金売吉次・吉内・吉六と云者有、都鄙トビを往来して金を鬻ヒサ

高瀬村…会津若松市
天正七年己卯…二五七九年
承安元…一一七一年

き、此所に来りて渡船破損し吉六溺アブれて死けり、其頃高瀬川逆浪岸サカガミを浸ヒクと言リ、資財皆流れそのと、

まる所今葛籠田ツ、ラ・革袋カワ等の遺名有りてけると言、村の西に吉六檀ツ有り、彼か冥福ミヤウツクのため観音を安置

す、今の尊像是也、後代修復の料を計りて軀中クに金を納め置しを、元龜・永祿の頃奸僧カン有て金を盗取

けると記録に見へたり、川もあせはて旅人の悩ナヤミもなく侍る

②③本…今は川も

高瀬 御詠歌

十五番 高瀬 乗り得ても心ゆるすなあまを舟 高瀬の波は時をきらわす

平沢 十六番札所

一平沢村観音御長壺尺五寸、三間四面西向、広沢山国性寺と言、此村昔者広沢と言しを、いつの時か平沢と唱へ来れるにや、月の名所に更科広沢とかやあれば、そのかみいか成人か住て、かく名付たるもしらすかし

平沢村…会津若松市

平沢 御詠歌

十六番 平沢 参り来て浮世を是に忘おく、心およばぬ平さわの月

中明 十七番札所

一中明村観音堂、此尊像昔時奇瑞有て沼木の沼より顕れ給ふ、御堂を営み安置せり、靈験新タにして老弱袖を連れ、貴賤信仰の頭を傾け、祈て達せずといふ事なし、天文^{壬辰}年真言の徒有栄密藏院を復興して今年迄百七拾貳年、後に此尊像を院内へ移し安置すと言り、毎年三月十七日旧例の会式有、御堂の跡田となりしか里人其稻を領ちて、尊像へ供物に奉らすとなり

中明村…会津若松市

天文^{壬辰}年…天文元・一五三二年

中明 御詠歌

十七番 中明 参るより頼みをかけし観世音 沼木の沼にうかむみつとり

滝沢 十八番札所

一滝沢観世音堂、行基菩薩養老年中の開基にて、昔ハ花表の西に立せ給ふと言り、遺趾今猶有、僧房衰て今の地へ移し奉るとなん、抑当社八幡宮ハ後冷泉院の御宇天喜五年^{丁酉}源の義家公創建し給ふ、其始役夫に課て一箕毎に土塊を運はせて築しむる故に一箕山と言、今年迄六百五拾年に及、其制巨宏にして傭人の暨ふ所にあらず、寛文年山崎氏大守公の貴命に依て改載所の記録に出たり、略説あれとも皆謬伝にして信用にたらず

滝沢…会津若松市

天喜五年^{丁酉}…一〇五七年

滝沢 御詠歌

十八番 八幡 瀧沢は落てなかる、瀧の水 流れのすゑはみろく成らん

○結願・帰宅の感慨

天下泰平国土豊成時に、会津山万代の池の亀ハ甲に三曲を備へて叟嶋に遊び、若松の若みとりもけふを千代の始にしてこのもかのもに榮え、民の寵も賑ひてとさ、ぬ御代のたふとさ、角足弱の行脚十日余り何の造作もなふし侍る、偏に御恵の源ふかく、流の末の我々迄も目出たしくと、宝永四年^{丁亥}五月朔日おのか家々に帰り侍る

②③本…向井氏
②③本…異説

○小池（御池）その他の
御詠歌

小池

今朝までハ親と頼みし笈摺を ぬきて納むる後の世のため
うき身もたすけ給へや観世音 道引給へ弥陀の浄土系
かれ木にも花の誓の観世音 まして頼をかけし身なれば
た、頼のめしめしか原の一切衆生^{サシモケサ} 我世の中にあらん限りハ
つみ深き人をも身をも頼なハ なんとたすけさせ給ハさらめや

円光大師の御哥

谷川の苔の下なるたまり水 つふくも行さらくも行
万代の願ひハ爰に納め置 水わ池より出る御手洗

宝永八年^辛 卯七月吉日書 五月五日ヨリ年号正徳元年と改

右書写舊重二十四歳ニメ書之

享保四年亥十一月廿六日

（裏表紙）「享保四年亥十一月廿六日 染文（方朱印）」

※以下は②③本にはなし
②本…国分丈助書
③本…高橋氏義督誌

宝永八年^辛 卯…正徳元・一七
一一年

享保四年亥…一七一九年